ふかまちのまど　第二五号　九六年　五月一日

こどもの命を守るために

深小学校教頭　金原雅子

色とりどりの草花が咲きものみな喜びと希望に満ちあふれる春、どの子希望で輝いている学年始めであるはずなのに、いじめによる悲劇や自殺予告などの電話や、フアックスが後を絶たない状況に胸が痛みます。

このことは、いじめによって自分の生き方を見失ったり、死に直面したりしている児童生徒が学校に現にいるということと厳しく受け止め、こどもの生命を守ることが緊急かつ重大な問題であると受け止めています。

いじめは、児童生徒の心身に大きな影響を及ぼし、命をも奪ってしまう許されない行為です。しかも、当事者だけでなく、いじめを傍観してはやしたてたり、見て見ぬふりをすることも含め、全ての児童生徒にかかわる深刻な問題です。

こうしたいじめ問題の原因、背景には私たち大人社会の価値観を反映している面もあり、根本的に改めていくためには社会全体の意識改革が必要です。それは長らく続いてきた学歴偏重の社会意識のなかで、教育に求められるものは受験学力に通じる知識の量を競うような画一的な内容に偏ってきた傾向があるからです。そこから過度の受験競争や偏差値万能などの弊害が生じ、子どもたちの間に様々なストレスをもたらしてきました。そのことが、いじめ不登校、中途退学等の問題を起こす最大の要因であると思います。

したがって子どもたちを取り巻く深刻な諸問題の解決のためには、こうしたストレスにつながる弊害を取り除くことです。全ての人が生涯にわたって心豊かに主体的、創造的に生き抜くことをめざす生涯学習の考えに立ち、教育を変えていかなければなりません。

学校においては、こどもたちが自分で課題を発見し主体的に考え、判断し、解決していく力を重視する「新しい学力観」に立った教育を推進しています。具体的には小学校の場合は、生活科など体験的な学習を充実したり、自ら学ぶ力をつけるような学習活動を工夫するなど、子どもたちそれぞれの個性を生かし伸ばす「一人ひとりがひかる学校づくり」を目指しています。そうした教育を背景にし、一人ひとりが自ら将来の生き方を考え目的意識を持って進路選択ができるよう進路指導の充実を図り、全ての子どもに意欲と希望をもって学校生活が送れるよう努力してまいります。

また、いじめ問題の解決には、学校のみならず家庭地域の役割も重要です。子どもにとって家庭は、人間形成が行なわれる最初の場であり、親とのふれあいの中で生命の尊さや、生きていくことのすばらしさを身につける場です。また、社会のルールに従って行動する力や、相手を思いやることの大切さを身につける場でもあります。

学校週五日制の実施により家族との語らい、子ども同士の遊び、多様な地域活動への参加、ボランティア活動など積極的に参加することにより、豊かで心たくましく生きる力が育くまれます。

いじめ問題解決のためには、学校、家庭、地域がそれぞれ教育機能を十分発揮し、一体となって取り組むことが欠かせません。

▽追記△

何か児童生徒の言動でお気付きがありましたら、学校の方へご相談なりお電話いただけたらと思います。共に解決に向けて取り組んでいきます。▲▲

「校舎と共に」（五）

―新しい二階校舎で―

石井哲代

昭和二十九年新しい校舎を祝う式がありました。さんしゅゆの花の咲くころでした。一階廊下も紅白の幕で飾られました。二階の東半分の廊下には、聖光庵で習っておられたお母さん方の、生花の展示がありました。来賓の方々の接待もお茶を習っておられたお母さん方が、あたって下さったと思います。式の後は紅白の饅頭を頂いて子ども達は帰ったと思います。祝賀の宴もあった筈ですが記憶にありません。

さて、教室の配置は、階下の中央玄関より東側は職員室、校長室、理科準備室と理科室。西側は会議室(後校長室)保健室、一年生教室、圖工室。二階は西側の階段を上がると二年生、三年、四年、中央階段。購買部、図書室、五年、六年教室と非常階段でした。廊下の壁はみな掲示板でした。二年生も二階教室で喜んだものです。

勉強の方は旧校舎の時と同じく自伸学習、表現活動に力を注ぎました。夏休み帳、冬休み帳に深小の子どもの作文や詩がのるようになりました。

市内の小中合同の音楽会にも進んで参加しました。手島校長先生が「さすが二中だね。素晴しい合奏だと感心しながら聴き聴きメンバーをみると深小の出身者ばかりだった。二人他校出身者だった。深小の合奏隊といっても過言ではないね。」と子ども達の成長を喜んでおいでした。また、校長会等へ出席して帰られると必ず「二中で深の子はよう出来る、いい子だと評判がいいんですよ。僕と一緒にいた訳ではないが、深の子は、深の子はと賞められ通しで嬉しいですよ。力がはいります」と、目を細めて喜んで下さっていたことも懐かしいです。

大自然の中で、自然を愛し、自然を相手に大地を愛する勤勉な親の姿に、はぐくみ育てられた深町の子ども達だからこそと、あの当時が改めて懐かしく偲ばれるのです。▲▲

深の歴史（七）

―昭和の大旱魃―

高崎壽郎

郷土誌に「昭和一四(一九三九)年未曾有の大旱魃に遇い飲料水にも欠乏した。稲作は平年の一割作程度であった」とある。

昭和四(一九二九)年も旱魃のため稲の収穫量は大減収だったようだが、昭和一四(一九三九)年のはその比ではなかった。

深は藤井川の源流ではあるし、旱害は受けやすい土地柄だった。そのため、昔から共同の溜め池や私池(個人専用の池)を多く造って灌漑用水の確保に努めた。又、水の当たり難い田には野井戸を掘った。

その年、田植えはどうにか終ったが以後晴天が続いた。やがて、池や川は枯れ始め井戸も水の出が悪くなった。

人々は、暗い内から起き、昼前まで一家総出で水汲みをし田に当てた。これが日課になった。乾燥を防ぐため、株間に藁を敷いたり、一株一株やかんで水を注いで歩いたりもした。

「苦しい時の神だのみ」という。村人は雨乞いのため、村社干川神社山頂の竜王山(各地にあり、雨乞いの山とされている)に集まった。

宮司が須屋の前でのりとをあげ、雨乞い祈祷をした。集まった人々も、「雨を降らせたまえ龍王の大神」と唱えた。そして、各家から背負って登った薪木を一斉に焚いて空中を黒い煙でおおい天をこがし雨を待った。

当日は近隣の村とも連絡しあって同時刻点火した。

村人の必死の願いや祈りの効なく、時はすぎた。出穂になっても雨は降らない。台風シーズンになっても素通りし、雨の恵はなかった。

大川も溝という溝もすっかり干上り、魚をはじめ水生生物は絶滅状態になったようである。

収穫の秋、背丈けの短い黒ずんだ稲は立ったままだった。わずかに井戸の囲りや水掛のよい所で実りをみたようだ。だが、ざぶ(畳)だけは、表面は乾き干割れていたが普通の収穫があったという。

そしてほとんどの家は翌年の種籾にも困ったということで、毎日の生活もどんなにか苦労が多かったことだろう。

これ以後、深では雨乞いの記録はなく、昭和一四(一九三九)年の大旱魃は、五〇年か百年に一度のものといっても過言ではないと思う。

上組では、翌年魚切池の上流約三百米の所へ魚切新池を造った。この池は、構造上の欠陥から昭和二〇(一九四五)年の枕崎台風で流失するが、各地で新池と名のつく池は、この大旱魃を教訓として造られたものが多い。

尚、「同年七月三一日、奥野山に落雷あり山火事となる」と、深郷土誌にあるが、大旱魃の年のこと、消火には相当手こずられたことだろう。「泣き面にハチ」とはまさにこのようなことか。▲▲

展望席

今回は、ホウレンソウについて。「あかざ科の一年生または越年生植物」の話しではない。近所関係、組織を健全に保つための報告・連絡・相談である。▼これは人間が集団生活を営む上で必要としたノーハウを今に伝える貴重な知恵である。これを端的に示したのが日露戦時の満州軍総参謀長児玉源太郎であろう。彼は、どんな些細なことでも総司令官大山巌の耳に入れ、スタッフの限界をわきまえ行動した。▼報告を怠る。一本の電話を省く。独断専行する。この一事で良かるべき人間関係が一挙に崩れる。これは日頃よく耳にし、目に映る。が、一番困るのは始めから守る意志のない約束をする人である。▼報・連・相がうまく機能している組織は生きている。企業(官庁)の教育、しつけレベルを測るには、受付嬢の対応をみるのが一番と、よく言われる。教育のゆき届いた企業は、事前連絡さえしておけば来意を告げただけで目的の人に合える。受付嬢は事前に担当者から連絡を受けているのである。

深町人口動態

93・7月	896人	0
94・4	900	＋4
95・3	937	＋41
95・6	960	＋64
95・9	972	＋76
96・3	987	＋91

私の健康法

斎藤哲三

私は食事に対してとても気を使っている男です。食事内容ではありません量に対してです。連続して衝動食いをするものならたちまち生命維持にかかわる事なので私にとっては、最大の恐怖心といっても過言ではないでしょう。

この発端は約二十年前私が四十歳中頃、体重が七十キロを越して膝に痛みを感じだし、片方に水が溜まって歩行が困難になったことがあります。多分その頃から成人病が始まっていたのかもしれない。目はうすくなり始め、頭髪の抜けるのが目立ち、歯の動くのを感じてアメ玉を噛むと割れるし、頭の動きが鈍くなって上司の名前すらとっさに出て来ないという惨状で、今から推測するとそれが糖尿病の初期だったのであろう。この様ては遠からず会社勤めは出来ないと思った。

当時、この窮地から脱するには減食するしかないと思った。相当な決意で飯二杯を一杯にした。人生の四大苦労は生・老・病・死だそうだが、その中の老いる苦しみとはこのことか、と思ったし、今でもそう思っている。

約半年くらいで五十五キロまで減量した。今までの忌まわしい症状は全く消えて歩行時など走りたくなったり、我ながら頭がとても鋭敏になったことに感心したのを憶えている。

先に述べたことから次のことを私は発想した。

人間は死の極限に接近する時、活動は殆ど零に近くなるのだから食事の量も殆ど必要としなくなるに違いない。その現象は突然訪れるのでなく、徐々であるから高齢に従って徐々に減食していくのが自然の姿であり本来の形である。

だが一般的にはこれに反して高齢に従って食欲が落ちると、体力気力が衰えるからその防止のためにも食べるべきだ、とよく聞いてきたものだがこれはいかゞなものであろう。体内での余分の葡萄糖は神経系統を犯すと聞いている。

宗教界、禅宗あたりの断食、イスラムはラマダという断食期間をもうけている。これ等は単なる精神修養だけでなく糖尿病予防の為かも知れない。腹八分はなんと健康の的を射て高遠なる名言か。

如水館高校野球部だより

◆四月二十八日福山市民球場で行なわれた県大会で如水館高校が見事優勝しました。夏の甲子園を目指して頑張ります。

◆如水館グランドで五月行はれる対外試合は次の通りです。たくさんの観戦をお待ちしています。

- ㊏四日　鹿児島県第一校
- ㊐五日　松山工　W
- ㊏六日　奈良耳成
- ㊐一九日　愛媛県・山口商
- ㊏二日　東京堀越　W

いらっしゃいませ

☆縫掛幸治様　下二班　四月

五月町内行事予定

☆小学校・幼稚園

- ▼小運動会　二日（雨天の時七日）
- ▼眼科検診　一〇日
- ▼参観日（昼食後修学旅行説明会）14日
- ▼修学旅行　一六～一七日
- ▼歯科診断　二二日
- ▼耳鼻科検診　三〇日

☆幼稚園

- ▼弁当始め　九日
- ▼参観日（家　総会）一四日
- ▼視力検査　一五日
- ▼誕生会　二九日
- ▼人形劇鑑賞　三一日

☆女性会

- ▼親睦会　下　三日
- 中　四日
- 上　二四日

▼役員会　上旬

☆消防団

- ▼分団長会議　下旬
- ▼さつき祭り協力　下旬

☆町内会関係

- ▼町内会連合会総会　下旬

★下組町内会役員改選結果

会長　梶谷和伸

副会長　秋広澄男

（他は選ばれました）

★消寿会で入会者を募集しています。入会希望者は左記まで。森本・池上・金掘。入会資格①六〇歳以上②年間会費四千円③旅行等あり。